

安本亀八の風俗人形

— 欧米博物館への作品寄贈と財界人 —

本 田 代 志 子

はじめに

一九世紀末以降、欧米の民族学博物館では、世界の広範な地域や民族についての資料収集・展示が活発化し、日本部門も設けられはじめた。その際の日本人および風俗の紹介では、等身大の人形が展示に活用されるようになった。その後、時代とともに博物館における展示の観点が移り、展示用の人形に求められる特徴も変化した。

欧米の博物館に収蔵された展示用人形に関しては、これまでの研究で、一九世紀後半は生人形師による人類学的関心にそった身体的特徴を捉えた人形、二〇世紀以降は主に着物を見せるための風俗人形となったことが判明している。これらの大半は、来日外国人によって購入・寄贈されたもので、他は万国博覧会の日本の出品物が、会期終了後に現地で寄贈・売却されたものなどである。¹

本稿では、欧米の博物館に現存する等身大の人形で、特定可能な制作者のうち、最も数量の多い安本亀八に注目する。すでに特定されていた作品は一点であったが、調査により新たに三つの博物館の五点が判明した。さらに、日本の財界人が博物館の展示改善のために積極的に関与し、安本亀八の作品を寄贈した二事例が明らかとなった。この事例を通して、安本亀八の生人形から、風俗人形およびデパートのマネキンへ展開した状況をたどり、作品の特徴と博物館の展示方針との関連について考察を行う。

第一章では、一九世紀末から二〇世紀初頭に展示用人形として用いられた、生人形、風俗人形の範囲を示す。次に、安本亀八の歴史的位置づけについて、初代亀八からの生人形師としての伝統の継承と三代目としての新たな活動の方向性を分析する。その後、欧米の博物館での展示用人形の展示方針や受容の事例を、生人形から風俗

人形への展開という点から考察する。

続いて、日本人が博物館での展示改善を求めた二つの事例を取り上げる。第二章ではグラスゴウのケルヴィングローブ博物館、第三章ではピッツバーグのカネギー博物館において、日本の財界人が安本亀八の作品を寄贈した経緯を精査し、展示状況と作品の特徴との関連、さらに寄贈者の国際交流への取り組みを明らかにする。

最後に、安本亀八の人形の特徴と博物館の展示方針について総括をおこなう。

1 安本亀八と風俗人形

1-1 生人形と風俗人形

博物館の等身大の展示用人形について、本稿では風俗人形の語を用いる。比較で用いる「生人形」とは、一八五〇年代後半から八〇年代、等身大の木彫で、物語の登場人物の個性を逼真的に表現し人気を博した見世物興行および人形を指す語である。

さらに、広義としての生人形は、一八九〇—一九三〇年代頃に、生人形と同様に胴体を簡略化した手法で制作された、国内外の博覧会やデパートで用いられた等身大の人形を含める場合もある。しかし、本稿ではこれらを「風俗人形」として扱う。ほかに、時代参考人形、模型、標本人形、衣装人形と呼ばれることもあった。

以上のように、本稿の「生人形」は狭義の意味に限定し、博覧会や博物館で日本の生活を紹介する等身大の人形に「風俗人形」の語を用いる。なお、欧米の博物館では、通常、等身大人形 (life-sized figure)、模型人形 (model figure)、マネキン (mannequin) の語で記されることを付記しておく。

1-2 安本亀八

安本亀八は、熊本に生まれた初代亀八（一八二六—一九〇〇）から三代続いた生人形師である。二代目は、初代の長男亀次郎（一八五七—一九九）、三代目は、その実弟で三男の和一（一八六八—一九四六）である。

初代亀八は同郷の松本喜三郎が生人形興行で活躍したことを機に、一八五〇年代後半に大阪で生人形を始めた。一八六〇年代は近畿地方で肖像彫刻を制作、その後、東京で生人形を主に活動した。一八八〇年代後半以降は、親子の合作が増加したようである。亀次郎は一八九八年に二代目となったが翌年に死亡し、和一が一八九九年に三代目を継いでおり、生人形の制作方法を熟知していたといえる。しかし、三代目亀八の頃には、生人形の人気は衰退しており、風俗人形としての等身大人形を手がけるようになった。

三代目亀八の作品で生人形を継承した点は、身振りなどの演劇性を有することと、着物で隠れる部分は簡易な組み立て式で効率化を



図1 安本亀八 人形の制作方法
『主婦之友』16巻(4)1932年より転載

図ることだといえる。

一方、新しい特徴は表情である。生人形師の松本喜三郎や初代亀八は、一瞬で人々の目を引きつける表情が重要であったのに対し、三代目亀八の場合は、際だった特徴がなく、控えめな表情である。これによって、風俗人形の目的である着衣に目を向けさせる効果があるといえるだろう。

さらに、身体構造も改良を重ね、着装の際に着物を美しくみせる方法を編み出した。「本来は木彫にするのですが、着附してから柔らかな曲線が着物に表れないので、半生の苦心の末、発見せられた秘法です。最初に板で胸の形をした箱を作り、その上に、綿で丸味をつけ、日本紙を貼り上げて……」(図1)と語っている^③。こ

のような工夫によって、衣服の魅力や特徴を引き立たせ、美的価値がある^④とみなされ、依頼主や鑑賞者に評価されたと考えられる。

ここで、欧米の博物館所蔵品の制作時期と重なる一九〇〇—二五年頃の活動状況を概観したい。主に、花やしきの菊人形や浅草公園の生人形の見世物、国内外の博覧会出品の風俗人形、デパート(松屋、伊勢丹等)のショーウィンドーのディスプレイの三つの分野を手がけた。以下、時系列で挙げていく。

一九〇三年は、第五回内国勸業博覧会にて、台湾の婚礼、葬礼、紳士などの風俗人形が出品された。一九〇四年は、農務省の依頼でセントルイス博覧会に天平時代の文官、藤原時代の武官等を出品、その作品が一九〇五年から東京国立博物館に展示された^⑤。

一九〇九年頃は、後述のフライブルクの踊り娘、一九一〇年は日英博覧会で上古から現代にいたる風俗人形が展示された。一九一一年はドレスデン万国衛生博覧会出品、浅草公園花やしきで俳優似顔菊細工活人形、一九一二年は大正博覧会で松屋呉服店「母の留守」が出品された。一九一五年は後述の成人男女像(グラスゴー)のほか、江戸記念博覧会では約五〇体の人形が制作された。一九一六年は花やしきで生人形興行、一九一七年は日本橋白木屋呉服店のための人形を手がけた。一九一九年は全国染織工業博覧会にて「藤原時代」「桃山時代」などの風俗人形、一九二〇年、松屋で「七五三お祝い着」、一九二二年は後述の女性像(カーネギー博物館)が制作

された。一九二二年は平和博覧会にて服装の変遷を出品。一九二五年は、銀座松屋の開店記念人形百体を一年かけて制作した。

このように、政府をはじめ、デパートや商業施設の催事を広く手がけており、その繋がりには三代目の利にあると思われる。初代亀八は博覧会に出品、さらに審査員も務めていたほか、吉原の季節飾りを親子合作で手がけるなど、「安本亀八」という名が長きにわたって広く知られていたといえる。そのことが、後章に挙げる財界人からの制作依頼に結びつくと考えられるのである。

1-3 欧米の博物館所蔵の等身大の人形

次に、欧米の博物館における等身大の人形の収蔵および受容の状況を概観したい。日本展示の初期では、館長が来日して直接収集した良質な作品が見られるが、小規模の博物館では収集の機会が限られており、個人からの寄贈品が展示されていた。

この頃の等身大の人形の展示目的は、人形の造形表現（生人形）、日本の風俗紹介（風俗人形）、甲冑や着物の付随品（マネキン）などである。造形表現という観点でこれらを比較すると、生人形では彫刻表現が関心を集めていたが、風俗人形では良質な表現として好意的に受けとめられていたものの人形が主とはいえず、マネキンになると関心が払われることなく、記録もなされていない場合が多かった。

まず、造形表現が評価されたのは、生人形の全盛期に活躍した人形師の作品である⁶⁾。北海道開拓使のお雇い外国人ケプロンが日本滞在中に、スミソニアン博物館（アメリカ合衆国、ワシントンD.C.）の人類学部門での展示を念頭において注文したものである。鼠屋伝吉《農夫婦像》（一八七五年）、松本喜三郎《貴族男女像》（一八七八年）は、全身像で裸体表現が求められていた。通常の展示は着衣で、農夫婦は鋏を手に持つ姿で展示されていたが、農夫の禪姿の写真が年鑑に掲載されており、日本人の身体的特徴を示すものとして関心を集めていたことが窺える。その写実的表現の技術の高さが、博物館での他民族の人形制作の方針に影響を与えたという⁷⁾。なお、人類学的観点で、身体的特徴を重要視して収集・展示されていたことが明らかなのは、この事例にとどまる。

次に、一八九一年に横浜の美術商ディーキン兄弟商会のハリー・ディーキンが、故郷のシェフィールド博物館（イギリス）へ寄贈した花沼政吉の《相撲像》は、写実的な彫刻の技術が、地元のクラフト産業の参考になると考えられた。展示は現在まで継続されており、相撲という主題と、躍動感のある表現が評価されている⁸⁾。

同様の例が、初代安本亀八の《相撲生人形》である。個人収集家フレデリック・スターンズが横浜で購入し、一八九二年に故郷のデトロイト美術館へ直接寄贈した⁹⁾。ここでは日本の相撲を表現した迫真的な彫刻として評価された。

次は、日本の文化、風習を伝えるう風俗人形として扱われたものである。その際、彫刻という芸術作品としての評価はなされていないが、着衣のための人形としての質の高さは認められ、消耗品として廃棄から免れ、現在まで保管されていると思われる例もみられる。

ブレイメンのウーバーゼー博物館には頭部が六〇以上、他に手足が多数現存する。作者不明であるが、館長が長期に渡って、横浜の商社を通じて、日本人、韓国人などの顔を注文して購入した¹⁰。博物館では、日本の生活の場面（神社、庭園、家屋等）を紹介するジオラマ展示で用いられていたが、展示の中心は家屋等の構造物や調度品であり、人形は場面説明の副次的なものであった。ほか、バチカン博物館では一九二四年の布教博覧会の出品人形が寄贈された¹¹。次に、三代目亀八と特定される作品を年代順に挙げる。

まず、一九〇九年にドイツのフライブルクの博物館の館長ヒューゴ・フィッケが来日した際、横浜の美術商クーン&コムルにおいて、店頭に並べられていた《踊り娘》（図2）を九〇円で購入した¹²。三代目安本亀八が東京帝室博物館の人形を制作した人形師であると認識した上での購入であった。

一九一一年のドレスデン万国衛生博覧会に出品された六体が現地の博物館に収蔵されている¹³。博覧会では三越の着物が詠えられた衣服紹介の人形であった。小学生男女の作品は三代目亀八によるもの



図2 安本亀八 踊り娘 1909年
フライブルクの博物館での展示記録写真
Vorlage: Stadtarchiv Freiburg, Sign. M737
Städtische Sammlungen Nr. 6605

と判明し、残る家族の像四体、軍人（現存せず）も三代目亀八のものとして推定される。

さらに、後述する一九一五年のケルヴィングローブ博物館《成人男女像》、一九二一年のカーネギー博物館《女性像》では、寄贈時に安本亀八の作品であると伝えられている。

このように欧米の博物館での風俗人形の流通に関しては、生人形全盛期の一九世紀末は、来日した外国人が人形師の作品を購入・寄贈していたことが分かる。ほかにも、個人旅行者が日本で購入した物品を地元の博物館へ寄贈したが、質が低いものが混在していたようである。次章以降は、このような状況を改善した日本の財界人と

作品寄贈の事例を取り上げる。

2 ケルヴィングローブ博物館所蔵の成人男女像

2-1 博物館と男女像の概要

イギリス、グラスゴウのケルヴィングローブ博物館には、三代目安本亀八が制作した成人男女の像が(図3)、一九一五年に日本人によって寄贈された。男性像は、高さ一六五センチ、幅五八センチ、奥行三四センチで、女性像は、高さ一六一センチ、幅四八センチ、奥行三八センチである。ともに着衣で、像は自立可能である。

一九世紀後半から二〇世紀初頭、博物館の所在地グラスゴウと日本は、特に造船や海運業の分野において繋がりが深かった。一八八〇年から一九一四年にかけて約六〇名の日本人学生がグラスゴウ大学に登録し、海運や電子工学などを学び、造船や海運、海軍の関係者など多くの日本人が滞在しており、一八八九年にグラスゴウ日本領事館が設けられた¹⁵⁾。初代名誉領事はアルバート・リチャード・ブルウンで、日本政府とも繋がりが深く、自社で船舶の注文を受けていた¹⁶⁾。このように、グラスゴウと日本の間は、経済および人的交流が密であったことが、作品寄贈に至る理由の一つといえるのである。



図3 安本亀八 成人男女像 1915年
グラスゴウの博物館での展示記録写真
Collections of Glasgow Museums
©CSG CIC Glasgow Museums Collection

2-2 作品寄贈の経緯

まず、作品寄贈までの経緯を概略すると、一九〇〇年にテイラー船長が「等身大で綿地に染めのある民族衣装を着た日本人男女像二体」を博物館に寄贈し、展示が始まったようである。

一九〇〇—一〇年代、多くの日本人がグラスゴウに滞在、訪問しており、博物館でこの作品を見学し、改善の必要性を感じたと推測される。その後、一九一五年、有志四八人の出資にて、日本領事館名誉領事のスコット・ヤンガーを通じて、三代目安本亀八の成人男女の像が博物館へ寄贈される運びとなった¹⁸⁾。

一九一五年度の博物館の年鑑では「この部門で最も重要な新規の

収蔵品は、日本人の紳士と淑女の二体の像で、完全な造形で等身大、優雅なイブニングドレスを着用している。この作品は、当施設を訪問した日本人紳士たちが寛大にも帰国後に寄贈したものである。」と作品の質も高く評価された記述が見られる。その後、寄贈作品は常設展示されていたが、翌一九一六年に、現地を訪れた松村は、古い人形も展示されている状況を知り、ヤンガーへ次の手紙を記し、寄贈の動機が、日本を正しく示していないことであったと明言している。

私たちの意図は、古い人形と新しい人形を入れ替えることでした。なぜなら、それが日本の服装を示しておらず、いかなる点からみても、日本の美術ではないからです。古い人形に対する貴方や博物館の見解を、ほかの出資者に説明したところ、取り除くことができない理由は納得しました。その人形も寄贈された作品であるため、損傷などの理由がなければ同意しないことだと私は理解しています。当局からの唯一の申し出は、古い人形を撤去して、この美術館やギャラリーほど多くの人が訪れない他のミュージアムへ移すというものです。

この博物館の考えも尊重いたしますが、私たちは古い人形と新しい人形を取り替えて頂きたいと願うのです。破棄することが難しいようでしたら、その場から外し、どこか鑑賞者の目のつかない

い場所へ置くよう、あなたのお力添えをいただきますよう、お願いいたします。²¹⁾

作者に関しては「安本」作と伝えられ、作品紹介の際に記載されている。本作品は、二〇〇〇年頃まで展示されていた。

2-3 成人男女像と安本亀八

一九三〇年頃の「現代名人伝 人形師安本亀八翁」には本作と思われる逸話が残されている。この記述の真偽の程度は不明だが、寄贈者および亀八の制作の姿勢が窺えるため、引用する。

それ「大正博覧会」よりずっと以前の事、三井の某重役が英国へ行った時、その博物館へ入つて見た。そこには各国人種の容貌、習性等を示す人形がずらりと並べてあつた。勿論日本人もそこに並べてあつたが、その容貌の醜いを見せられて身もすくむ程肩身の狭い思ひをした。そこで早速当局者に交渉してその撤回を要求した。その代りに真に日本の紳士淑女を代表する人形を日本から送る事を約束して来た。彼は帰朝早く亀八翁を訪ねて博物館に送るべき人形を依頼した。翁は快諾した。が果たして如何なる容貌が日本の紳士淑女を代表するものだらうかを先ず研究しなければならなかつた。翁は例の凝り性から、すべての仕事を擲つて

その容貌の研究に没頭した。其間、註文主からの再三の催促を斥けつつ、約二年の時日を費やして漸く研究を完成して愈々仕事にとりか、つたのであった。

その時の翁の作品は、日本民族を代表して堂々と英国博物館の一室に飾られてゐる。²²⁾ 「」は筆者補足

前述の書簡と同様に、「日本」の紹介が不適切であることに納得できず、正確な日本の姿を伝える使命感をもっていたと言えるだろう。

なお、博物館の作品記録(台帳や作品紹介では、着物の種類や素材、用途について詳細に記載されており、衣服に注目していたことがわかる。なお、先述のドレスデンの家族の男女の像も、制作年が近く、顔立ちが類似し、作品登録の記載状況の共通点などから、当時の博物館では、人形よりも衣服へ関心を寄せていたといえるだろう。

3 カーネギー博物館所蔵の女性像

3-1 博物館および女性像の概要

アメリカ合衆国ペンシルバニア州ピッツバーグのカーネギー博物館は、現在、美術と自然史分野を主とした博物館である。そのう

ち、自然史分野の人類学部門に、乗物に乗る女性像(図4-6)が現存する。

その日本コレクションは、地元の実業家ヘンリー・ジョン・ハインツが形成に寄与した。彼は訪日の折に美術品を収集し、一九一三年に乗物を博物館へ寄贈した。このとき、博物館はその歴史や用途を明確に伝えるため、乗物に乗る女性、乗物を運ぶ二人の男性の人形を制作し、展示に加えた。その後、一九二一年に洪沢栄一が女性像を寄贈するまで、この展示が続けられた。

洪沢寄贈の女性像は、座高八〇センチ、幅(肘から肘まで)四八センチ、奥行(着物含)六二センチで、乗物のサイズ(内部は高さ八八センチ、幅七〇センチ、奥行一〇〇センチ)に合わせて作られた。女性像の頭部および左右の手首から先は木製、他の部分は紙製と推定される。²³⁾ なお、頭髪の一部の乱れを除き、保存状態は良好である。²⁴⁾

3-2 洪沢栄一の寄贈経緯

洪沢栄一は一九一五年一月二五日、ピッツバーグで旧知のハインツとともにカーネギー博物館を訪問した。²⁵⁾ その際に、ハインツの寄贈した乗物に添えられた展示人形の服装が、時代や身分に相応していないことに気づいたのである。



右 図4・5 安本亀八 女性像 1921年 カーネギー博物館蔵 (ピッツバーグ、アメリカ合衆国)
左 図6 カーネギー博物館での展示風景 Courtesy of Carnegie Museum of Natural History

日本古代の乗物を見たが、之を熟視すれば乗物を担いで居る駕籠舁と其中に乗つて居る婦人とは、古代現代取り交ぜの装飾及服装なりしかば、其駕籠の時代に相当する人形を調製せしめて送付せんと、(後略)²⁶⁾

このように考え、その場で博物館の館長へ代わりのものを送ると申し出たが、渋沢の帰国後すぐに動きはなかった。カーネギー博物館長ホーランドは、渋沢の訪問から二年後の一九一七年二月、ハインツに仲介を依頼した。

渋沢氏がカーネギー博物館にいらした際に、乗物の展示人形が着用していた衣装を交換するという約束をされたことを貴方も覚えておいででしょう。乗物に乗る女性は、高位の女性ではなく、田舎の着物を身につけ、駕籠舁は大工の様な姿で、その場面にふさわしいものではありませんでした。渋沢氏が間違いを指摘し、それらを取り換える約束をしました。我々は申し出に大変感謝し、彼はそれを今でも心にとめていくると確信します。必要な寸法を貴方に伝えますので、貴方が渋沢氏に手紙を書く折には、彼が約束を果たしてくれることに対しての私の謝意を伝えて頂きますと幸いです。²⁷⁾

この二日後、ハインツの秘書は、乗物のサイズをニューヨークの山中商会経由で日本の渋沢栄一へ渡すと返信した²⁸。当初は衣装のみを交換する案もあったようである²⁹。その後の約二年間の記録はなく、一九一九年に渋沢の息子の秀雄が博物館を訪問した際に、館長から人形の催促を受けたようである。一九二一年四月に作品が完成した旨、渋沢秀雄からホーランド館長へ連絡がなされた。

私「渋沢秀雄」が貴博物館を訪れて早くも二年になろうとしています。私との会話をまだ覚えておいでですね。改善が必要な乗物に乗った日本人のお姫様についてでした。交換のために、ふさわしい衣装一式を喜んで送る旨を伝えましたが、帰国後は仕事に追われ、制作を約束してくれた芸術家の制作も遅れたため、今までその計画を実現することができませんでした。しかし、間もなく、発送準備ができ、英語の説明も合わせて送りまします。父がこの件に強い関心をもっており、一式が届き次第、こちらで入念に点検するでしょう。³⁰

そして、作品が完成し発送の時を迎えた。渋沢栄一は一九二一年七月の博物館長への手紙のなかで、これまでの経緯を振り返り、作品寄贈への思いを次のように述べている。

「」は筆者補足

一九一五年の貴国訪問の際に貴博物館を訪問したことは私の喜ばしい思い出となっています。しかしながら、その訪問の際に、一つだけ私の気分を害したものがあり、それはハインツ氏が寄贈した乗物の人形に見られたアナクロニズムでした。

その後、私のいとこで、当時アメリカに滞在していた田中孝子、二年前に貴国を訪問した息子の秀雄を通して、改善策を示しましたが、二人ともその結果には満足しませんでした。そこで彼らとこの件について話し合い、古いものと取り換えるため、別の人形を送るという結論に至りました。行列の一式を用意したいと思いましたが、あまりにも長い時間がかかり、展示のために広い場所を必要とすることが懸念されました。このような状況を考えると、主要人物、説明、図解した写真を送ることが最善と思われました。「婦人」は現代日本で有名な芸術家によって作られました。彼の名前は安本亀八です。この「婦人」はあらゆる点で、その生きた時代を完璧に表現しています。いかなる批評家も欠点を見つけ出すことはできないと確信しています。

今回の件で私が学んだのは、私たちがいかにたやすく過ちを犯しやすいかということです。古く良く知られた慣習を再現するという単純な試みにおいてさえも間違いを犯すのです。最も残念で、驚くべきことに、世界の国々において、多くの誤解や誤った説明がおきていることです。

国際的な友好関係や平和に関心のある人は、このような誤りから自らを守らなければなりません。それだけでなく、それらが生じたときはいつでも訂正する用意がなければならぬのです。³¹⁾

このように、状況を判断し、自ら行動をおこすことで、友好関係が築かれていくことを、率直な言葉で伝えようとしている。その後、作品は八月一日に横浜からサンフランシスコ経由でピッツバーグまで運ばれ、全費用は洪沢が支払い、関税は当局と協議する旨を助言している。³²⁾ 一〇月一〇日に税関手続き、一〇月一三日に博物館へ人形が到着した。人形の開梱は洪沢の依頼により田中が行った。³³⁾ その頃に、洪沢の訪米予定が判明し、洪沢から公式に女性像を寄贈されるのが良いのではないかとのお話になり、館長はその提案を受け入れ、贈呈式が行われることになった。³⁴⁾

3-3 博物館での展示状況

一九二一年一月一九日、洪沢栄一からカーネギー博物館へ、等身大の女性像と祝祭的な行列を描いた絵画の贈呈式が行われ、新聞でも報道された。

洪沢子爵は昨日午後、カーネギー博物館のハイנטツ・コレクションへ、素晴らしい作品を公式に送った。その贈り物は一八六

八年以前の封建的な時代の等身大の像である。その作品は現代日本で最もよく知られた芸術家の安本亀八によるもので、徳川家の女性が春の衣装を身に着け、將軍である父親の居城を訪問している場面を表したものである。

婦人は緑色の座布団の上に座している。彼女は二枚の白い下着、その上に、金や色とりどりに丹念に刺繍された緋色の衣装、黒のローブを身に着けている。漆黒の髪は貝の簪で留められている。着物の袖はかろうじて手首を隠すほど「短く」、眉は剃られ、これは、彼女が既婚者であることを示している。³⁵⁾

この寄贈時点で安本亀八の名前が伝えられている。また、美術館の年鑑では次のように記されている。

昨年、我々の民族学分野での特筆すべき新収蔵品は、美しい衣装で正装した日本の高位の等身大の女性像である。数年前、日本人の洪沢子爵が博物館を訪問した際、乗物の中に展示されていた大名の娘として展示された人物について不満を示した。彼は博物館に、細部まで完璧で、アメリカ国民に日本の高位の女性の真の姿を伝える人形を贈呈するという考えを表明した。一九二一年一月一二日、洪沢子爵は博物館を訪問し、人形を寄贈した。この贈呈品には水彩画が添えられ、大名の妻が將軍である父への訪

問時の行列を描写したものであった。この人形は日本の一流の芸術家である安本亀八によって作られた。³⁷⁾

この女性像は寄贈から数か月間、乗物内ではなく、座布団の上に載せられ、ガラスケース内に展示されていたようである。³⁸⁾ なお、本作は博物館で一九八〇年代まで展示されており、造形的表現が評価されていたことが、新聞記事や展示状況から読み取れる。

3-4 女性像と安本亀八

洪沢が三代目安本亀八へ人形の制作を依頼したのは、以前より作品や人物を知っていたためと思われる。その一例は、一九一五年の江戸記念博覧会で、洪沢栄一は顧問を務め、安本亀八は茂木習古の大油絵とともに、江戸時代を二九場面にわたって表現するなどの重要な役割を果たしており、洪沢もこれらを目にする機会があったと思われる。³⁹⁾ アメリカへの寄贈に際し、一流品を用意するという思いから、安本亀八へ依頼がなされたのであろう。一九三二年の『主婦之友』の記事で、亀八がこれまでの苦心の作を問われた際に、本作について語っている。

逝くなった澁澤子爵が、大正の初年渡米の際、市俄古の博物館中の、日本の大名の人形が、その風貌があまりに獐猛なのに一驚

して、「これは国辱ぢや」と自身博物館に名作を寄贈する旨を約束せられて、「日本人の代表として恥しくない、大名と奥方とを作つてくれ」とおっしゃられたときぢや。

いや苦しみました。苦しみましたぢや。先づモデルから苦みました。が、これはまあ、自分でも得心のいく出来栄ぢやつたー

その写真は、別けて大事に蔵つておいたのですがーあれも震災で焼いてしまひましたよ・・・⁴⁰⁾

このように、安本亀八にとっても渾身の作品であったことが伝わってくる。なお、カーネギー博物館に残る写真(図4・5)がここで言及されている写真で、洪沢が作品の送付前に日本で撮影し、安本亀八と博物館へ同じ写真を渡したと考えられるのである。⁴¹⁾

ほかにも一九三五年の「活人形製作界の第一人者 安本亀八氏奮闘録」の記事の中で、本作と思われる話が残されている。

明治四十年のある日、東京は鎧橋のたもとの洪沢栄一事務所にて、立派な活人形がかつきこまれ、また洪沢氏から人形を見るための招待状をうけた人々は続々と同事務所に集まってきた。

当時日本財界の大御所澁澤子爵は、かつきこまれた人形を前にして、微笑されながらしきりと感心してゐる。なる程、みればみる程、この人形はよく出来てゐる。年頃は三十歳と云ふ注文であ

つたが、これは正しく三十一、二とは見えない。そうかと云つて二十八、九にも見えない。矢張り三十だ。うまいものだ、と感心してゐられる。人形は三十石の格式の大名の三十歳の奥方が、籠にのつてゐる活人形であつた。傍についてゐるのは作者安本亀八氏である。子爵の賞賛の言葉をうけて、満足そうに笑つてゐる。

この人形は先般子爵が外遊中、アメリカの某博物館でみかけた大名奥方の人形が、余りにも事実と相違したもので、モスか何かを着た女が、箱根の雲助と云つたやうな籠かきの籠に乗つてゐるものであつたから、これを大名の奥方と云はれては困ると、それを撤回させて、その代わりに実物に近いものを送るといふ約束で、帰朝後子爵はその人形の制作を斯界の第一人者安本氏に依頼しておいたものが出来上り、立派な衣装をつけてアメリカに送られるものが、ここで一般に展覧されたのであつた。

子爵は、この人形がゆくと云ふことは、アメリカと日本との親善にとつて実によいことで、アメリカはこの人形で日本風俗を正しく識り、日本が如何に優しい国であるかと云ふことがわかるだらう、それにしても、丁度年頃を三十にみせるためには、どんな工夫をしてやるのかと、安本亀八氏にきいたが、そこに言われぬ苦心がいろいろと云つて、安本氏は答えやうとしなかつた。⁽¹⁴⁾

これらの二つの記事は史料が示す内容と概ね一致している。この

作品を通して、渋沢栄一は、正しい日本を伝えることが大切と考へ、友好を深めるための行動をとり、安本亀八も責任の重大さを感じ、日本人の姿の表現に取り組んだといえる。

この大名の奥方という身分や年齢は、亀八がデパート向け人形などで手がけた上流階級の婦人に類するもので、三代目亀八の特徴である上品な顔立ちの作品と言える。

むすびに

三代目安本亀八は生人形の流れを継ぎながらも、時代の求めるものを捉え、着物を美しく見せる工夫がなされたデパート用のマネキンを手がけた。その特徴は、上質な着物を引き立てるように、やや理想化された顔立ちで、庶民ではなく上流階級の姿である。これはスミソニアン博物館所蔵の松本喜三郎《貴族男子像》が、俳優が演技しているようだと現地で評されたことと対照的である。生人形は大衆の娯楽として意表を突くような劇画的表現があり、喜三郎の作品に貴族らしくない要素が見受けられたのかもしれない。一方、三代目亀八は、デパートの高級な着物のためのマネキンとして、立ち姿が美しく、上品な顔立ちを追求していた。それらの特性が、博物館で上流階級を示す風俗人形の展示に合致していたといえるだろう。

二〇世紀初頭は、欧米の博物館の日本部門の展示において、資料の欠如、日本への理解不足など、展示品が充分でない状況もみられた。その際、現地と繋がりのある渋沢栄一らの財界人が、展示が望ましいものになるよう、博物館側と関係を築きながら、日本理解を正しく進めるために私財を投じて、友好の絆を深めたことが明らかとなった。三代目安本亀八による控えめな表情の人形は、時代の変化に大きく影響されることなく、長きに渡って展示され、日本の姿を伝えてきたのである。

註

- (1) 欧米の博物館に現存する生人形の概要については以下を参照。本田代志子「生人形とミュージアム」、『生人形と松本喜三郎』（展覧会図録）所収、生人形と松本喜三郎展実行委員会（熊本市現代美術館・大阪歴史博物館）、二〇〇四年、一四八―一五五頁。本田代志子「欧米の生人形コレクション」、『生人形と江戸の欲望』（展覧会図録）所収、熊本市現代美術館、二〇〇六年、一四二―一五七頁。
- (2) 安本亀八については以下を参照。富森盛一『生人形師安本亀八』、赤目出版会、一九七六年、前掲の『生人形と松本喜三郎』、『生人形と江戸の欲望』など。
- (3) 『主婦之友』第一六卷四号、主婦の友社、一九三二（昭和七）年四月。「名工の仕事場訪問」にて三代目安本亀八の「森律子嬢が人形になる迄」で制作過程が写真で紹介されている。本資料は日本人形文化研究所所長の林直輝氏よりご教示いただいた。
- (4) 全国染織工業博覧会編『参考品目録・附・染織参考図書目録、時代風俗人形目録』、一九一九年、口絵写真および六一―一〇頁。博覧会で監修を務めた風俗研究会主幹の江島務は、「人形なるもの、美的価値の如何に多大なるものなるかを悟つて貰ひたかつた」ため、人形の手配は「東京美術学校の人形の役にたちそうなのを選択し、又浅草の安本氏に、私の趣向に適當する人形の有無を尋ね、その適當するものを借用し、稍適し難いものは解像してやうやく出来上つた」と述べている。
- (5) 歴代服装人形として展示された。恵美千鶴子「東京国立博物館所蔵の生人形（東京皇室博物館歴史部の歴代服装人形）」、MUSEUM 東京国立博物館研究誌、第六一〇号、二〇〇七年、五三―七七頁。この展示は、ドイツ・ブレーメンのウーバーゼー博物館、フライブルクの博物館の作品購入の際の資料においても言及されている。
- (6) 同時期には、エドワード・モース収集品である齊木次郎兵衛《百姓男女》一八八三年、ピーボディ・エセックス博物館（アメリカ合衆国、セラム）があるが、生人形興行との繋がりが見受けられないため、除外した。
- (7) 本田代志子「ホーレス・ケブロン収集の生人形 鼠屋伝吉と松本喜三郎」『文化資源学』第一四号、文化資源学会、二〇一六年、五三―六三頁。
- (8) 本田代志子「花沼政吉の生人形とディーキン兄弟商会」『人形玩具研究』一かたち・あそび』二五号、日本人形玩具学会、二〇一五年、九八―一〇七頁。
- (9) 現在のデトロイト美術研究所の前身。二〇〇五年より熊本市現代美術館蔵。初代亀八が主に制作したと推定される。本田代志子「安本亀八の相撲生人形と収集家フレデリック・スターンズ」『人形玩具研究』一かたち・あそび』二六号、日本人形玩具学会、二〇一六年、三四―四五頁。
- (10) 本田代志子「プレイメン・ウーバーゼー博物館所蔵の生人形関連書簡解題」『Art Canadas』第三号、熊本市現代美術館、二〇〇五年、五三七―五五〇頁。一九〇八年から制作していた人形師は一九一一年四月に死亡し、その後は新たな人形師が制作した。
- (11) 富澤治子「バチカン・ミュージアム所蔵の生人形調査」『Art Canadas』第八&九号、熊本市現代美術館、二〇二二年、四九八―五二二頁。なお、現存作品との照合は行っていないが、等身大人形の出

品者として、柳原伯爵家（少女）、東京女子専門学校（日本令嬢）、文部省（十二単衣正装ほか）などが記されている。川村精治「羅馬布教博覧会に就て」『補習教育』二三号、実業補習教育研究会、一九二五年、四九頁。

(12) 現在は、自然・人類博物館 (Museum Natur und Mensch) の名称。購入記録は、二〇〇四年の「生人形と松本喜三郎」展の準備期間中、当時のエヴァ・ゲルハルト館長よりフライブルク市古文書館での調査成果を提供して頂いた。前掲論文（註一）「生人形とミュージアム」を参照。Brief Ficke an Gruber vom 30.04.1909 aus Yokohama (Stadlarchiv Freiburg, D, Sm 6/1)。

なお、本作は注作品ではなく、店頭で二体の踊り娘が並べられていたようである。フィッケが同時に購入した作者不明の人力車夫は、ほぼ裸体の全身像で八五円であるのに対し、着衣で肌の表現がわずかで労力も少ない踊り娘が九〇円は高価といえるだろう。

(13) 収蔵経緯は前掲論文（註一）「生人形とミュージアム」を参照。現在、ザクセン州立民族学コレクション、ドレスデン民族学博物館が六体の人形を所蔵。小学生男女の作品について「人形は安本亀八氏の製作にして衣服其他一切の装飾は当店の製作にかゝる」と記されている。『みつこしタイムス』9(3)、一九二一年三月、口絵一頁。『三越』1(1)にも同記事掲載。

家族の人形四体も、出品状況、現地調査で確認した制作技法や造形表現をふまえると、三代目安本亀八によるものと推定される。三越呉服店は、ドレスデン万国衛生博覧会関連の記事で次のように記している。「当店亦日本風俗人形を出品し、東京市の需めに応じては日本小児童の人形をも製作して出品したる事は、其都度読者諸君に報道なし置きたるが、（後略）『三越』1(5)、一九二一年七月、八頁。

なお、現存は確認されていないが、軍人の像も制作された。「独逸ドレスデン万国衛生博覧会出品の一たる三代目安本亀八負傷兵治療中の衛生隊、並に看護長、軍医、看護卒等の人形を陳列し、各宮殿下の御台臨、陸海軍人及び招待者の観覧ある筈」読売新聞、明治四十四年一月六日、七日。その一部と思われる軍服姿の等身大の人形五体が、博

覧会の記録書に掲載されている。Verzeichnis der von der Kaiserlich Japan. Regierung ausgestellten Gegenstände. Gruppe J₂: Marine, Internationale Hygiene Ausstellung Dresden, 1911, 口絵写真。

(14) オリヴァ・チェックランド（杉山忠平、玉置紀夫訳）『明治日本とノギリス』法政大学出版局、一九九六年、一七九頁。

(15) ほかに一九九二年一月一七日に英国日本人会がグラスゴー府に設立された。読売新聞朝刊、一九九二年三月二二日。

(16) A・R・ブラウン・マクファーレン社は、一九〇〇—一九二二年の間に、日本から二一隻の造船の注文を受けた。前掲書（註14）チェックランド、二三〇頁。

(17) 一九〇〇年度の年鑑で、民族学部門の新規収蔵作品として次のように記載されている。“Two life-size Figures of Japanese Man and Women in native costume of printed cotton. Presented by Captain Taylor, Carbeth Cathcart.” Corporation of Glasgow (Parks Department), Museums and Galleries. Report for the Year 1900, Glasgow: Robert Anderson, p.9.

(18) この四八人の名字一覧がアルファベット表記で残されている。寄進者として、松本氏、江崎博士、須田博士、桂中尉、吉原中尉、横山中尉、岩佐中佐、竹崎中佐など。一部のみ特定できたが、グラスゴーに関係した人物が複数含まれていた。博物館所蔵資料。

(19) Corporation of Glasgow (Parks Department), Museums and Galleries. Report for the Year 1915, Glasgow: Robert Anderson, p.6, p.13.

(20) 松村は、N. Matsumuraと記されており、米井商会の松村昇と思われる。一九一〇年三月より一九一三年まで、ブラウン・マクファーレン社にて貿易実務研修をしていた。『ヨネイ』一〇〇年史：人が拓く人が創る』ヨネイ社史編纂室、一九九七年。

(21) 一九一六年六月六日付、松村より、ブラウン・マクファーレン社気付、スコット・ヤンガー宛ての書簡の写し、ケルヴィングローブ博物館資料。

(22) 月岡如雲「現代名人伝 人形師安本亀八翁」『朝日』九月号、出版年

- 不明(一九二九—三二年頃)、博文館、一六九—一七〇頁。
- (23) 二〇一五年の現地調査の際は、人形は着衣のままで観察した。座布団は幅七〇センチ、奥行九〇センチ、厚さ一一センチである。
- (24) 当時の作品紹介パネルには「この乗物を担ぐ二人の人物像は一九一三年に博物館のT.A. Millsが制作したもの、着物は一九一四年Mills&Co.による寄贈」と記載。この像二体も現存するが、衣装は渋沢寄贈のものである。
- (25) 渋沢青淵記念財団電門社『渋沢栄一伝記資料 三三巻』、渋沢栄一伝記資料刊行会、一九六〇年、四〇頁。渋沢栄一の日記の大正四年一月二五日の項目で次のように記されている。「午前十時半ヨリ当市ノカーネギー美術館及博物館ヲ一覽ス、館員案内シテ周密ニ説明セラル」
- (26) 渋沢青淵記念財団電門社『渋沢栄一伝記資料 三三巻』、渋沢栄一伝記資料刊行会、一九六〇年、二五九頁。初出『電門雑誌』第四一四号、大正一一年一月、二八—三三頁。青淵先生渡米紀行(五)のうち一月一九日(土曜日)、随行員増田明六による記録。なお引用は、作品寄贈の陳列式の演説内容のうち、見学當時を回想した部分。
- (27) 一九一七年二月七日付、カーネギー博物館長ホールランド(W. J. Holland)よりヘンリー・ハインツ宛て書簡の控え、カーネギー博物館資料。筆者訳。一九二七年の年報では、ハインツ寄贈の乗物を紹介する写真、古い衣装の駕籠かきの写真が掲載されている。Bulletin of the Carnegie Institute, Vol. 1. Number 3, 1927. なおカーネギー博物館資料では、Kago, palanquin と記されているが、本稿では「乗物」の語を用いた。
- (28) 一九一七年二月九日付、ハインツの秘書よりカーネギー博物館長ホールランド宛て書簡、カーネギー博物館資料。
- (29) 衣装の交換についての記述は、註27、30、31。
- (30) 一九二二年四月三〇日付、日よりカーネギー博物館長ホールランド宛て書簡、カーネギー博物館資料。筆者訳。この日の日とは、渋沢秀雄と推定される。渋沢秀雄は一九一九年に訪米した。
- (31) 一九二二年七月二二日付、渋沢栄一よりカーネギー博物館長ホールランド宛て書簡の写し、カーネギー博物館資料。筆者訳。原本はマンシ
- ルバニア州ピッツバークの税関ファイル。
- (32) 一九二二年八月二二日付、渋沢栄一より博物館長ホールランド宛て書簡、カーネギー博物館資料。
- (33) 渋沢は開梱についても指示した。「人形を正しく設置するためには、非常に注意深い取扱が必要ですので、田中じろう氏に、私の紹介状を持って貴方のところへ行くように依頼しました。彼は第一銀行の東京支店の副マネージャーで、この件に最初から携わり、人形のポーズの確認のために出発前に私の家へ来ます。」一九二二年七月二二日付、渋沢栄一よりカーネギー博物館長ホールランド宛て書簡の写し、カーネギー博物館資料。作品到着日時等については、一九二二年一〇月四日付、博物館長よりニューヨークの田中じろう宛書簡、カーネギー博物館資料。
- (34) 一九二二年一〇月一三日付、田中じろうよりカーネギー博物館宛て書簡、カーネギー博物館資料。
- (35) 一九二二年一〇月一四日付、カーネギー博物館長よりニューヨークの輸入商付で田中じろう宛て書簡、カーネギー博物館資料。
- (36) "Nipponese Financier gives Museum Figure of Lady of Feudal Era." *The Gazette Times*, Pittsburgh, Pennsylvania, Sun, Nov. 20, 1921, p.37. 記事はKamekachi Yasumatoの誤記。他の掲載記事は以下を参照。*The Gazette Times*, Pittsburgh, Pennsylvania, Nov. 19, 1921, p. 8.; *The Pittsburg Post*, Pittsburgh, Pennsylvania, Nov. 20, 1921, p. 7.; *Pittsburgh Daily Post*, Pittsburgh, Pennsylvania, Nov. 19, 1921, p. 3.
- (37) Carnegie Institute Pittsburgh, "Annual Reports of the Officers, Committees and Department of The Carnegie Institute for the Fiscal Year Ending June 30, 1922, 1921-1922," 1922, pp. 91-92. p. 92. 作品の概要、登録番号は同一二六頁に次のように記されている。なお安本亀八の誤記は原文タイプ。Shibusawa, Viscount 2 Kabutocho, Nihonbashi, Tokyo, Japan. Figure of a Japanese lady; the wife of a feudal lord, in costume. Made by Kamekachi Yasumato. Nov. 2, 1921. (6729). Painting representing procession accompanying the wife of a Japanese Daimio upon a visit to her father, a Shogun. Nov. 2, 1921.

- (38) (6730) この女性像が乗物外に展示されていた状況は次の記事に掲載。
“*Blood’u tell says Little Jap Lady as she gets proper place*” 一九二三年の二月九日頃の新聞の切抜記事。カーネギー博物館資料。この乗物にのる女性の掲載写真に Photo by Sun Staff Photographer と表記され、文中にサンの報道を契機に駕籠内に展示されるようになったと記されていることから、ピッツバーグ・サン新聞と思われる。
- (39) 江戸記念博覧会編『江戸記念博覧会案内』、一九一五年、扉口絵、三―三三頁。
- (40) 前掲書(註3)「市俄古の博物館」ではなく、ピッツバーグのカーネギー博物館の作品を指すと考えられる。
- (41) 現存する写真は六枚で、人形を多方向から撮影したものである。本稿ではそのうち二枚を掲載。この写真とともに保管されている封筒には、「飛鳥山」御印 人形写真七枚」と手書きされている。渋沢の居宅の「飛鳥山」との繋がりから、渋沢から送付された写真と考えられる。
- (42) 相原鐵雄「活人形製作界の第一人者 安本亀八氏奮闘録」『実業之日本』第三八卷第一四号、一九三五(昭和一〇)年七月一五日号、八〇―八二頁。ここでは「明治四十年のある日」と記されているが、正しくは一九二一(大正一〇)年であろう。

本研究はJSPS科研費JP18K00062の助成を受けたものです。

(ほんだ・よしこ／福岡教育大学)